
東方桃球伝

慧龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方桃球伝

【Nコード】

N0116Z

【作者名】

慧龍

【あらすじ】

神のミスで死んだ主人公はテンプレどおり能力をもらって東方の世界へ転生するが…。作者は初心者で一話が短いうえ亀更新になるかもしれませんがよろしく願いします。

プロローグ（前書き）

初心者なので日本語が変な所もあるかもしれないうえ、一話一話が短いですがよろしければ読んでください。

プロローグ

気がつくとも俺は真っ白な空間にいた。

どうやら俺は死んだらしい。

目の前にいる爺さんの話を信じればの話だが。

「いや、すまんかったのう。わしのミスで殺してしまつて」

どうやらこの爺さんは神様らしく、ちょっとしたミスで俺を殺してしまつたらしい。

「というわけで、お前さんをお詫びとして別の世界へ能力つきで転生させたいのじゃが、規則で

決まつてくじ引きで選ぶことになる。じゃから、この中から選んでほしい」

そう言つと、俺の目の前に穴の開いた箱があらわれた。

この中から選ぶのか。ふむ…これにしよう

ひいた紙に書かれていたのは『東方Project』

「東方の世界か、ならば妖怪の体に生まれ変わらせよう。次は能力じゃが、これは漫画などのキャラクターの名前が書いてあり、その者の肉体と能力を与えることになっておる」

それはつまり『モンキー・D・ルフィ』とか書かれた紙をひいたらルフィの肉体とゴムゴムの実の能力を得るということか？

「まあ大体そんな感じじゃ。ほれ、次の紙を引かんか」

新しい箱が出てきたので、俺は神の言うとおりにくじを引いた。そこに書かれていたのは。

『星のカービィ』

「……………」

重苦しい沈黙が辺りをつつむ。

俺も神もしばらく言葉を発することができなかった。

「あゝ、じゃあ転生の準備を「待てい!!」…なんじゃ?」

「なになかったことにして話を進めようとしている!!なんだよカービィって!!」

「知らんのか?人気ゲームの主人公じゃが「そういうことじゃない!なぜカービィを入れている!」

この爺さんはいきなり一頭身になれと言われた人間の気持ち的理解できないのだろうか。

「あゝ、同情はするが規則じゃからの。あきらめてくれ。それじゃあの」

そう言うと俺の足元に穴があいた。

「ちよっ、まだ話は終わってないぞおおおっつ!!!!」

そして俺は重力に従い落下していき、そこで意識が途切れた。

プロローグ（後書き）

のんびりとやっていききたいです

1 話（前書き）

長い話が書けない…

1話

目が覚めると森の中だった。

起き上がると自分の視線が異常に低いことに気づく。

「本当にカービィの体になってるし…」

ピンクでつるつるになった自分の手を見て一人落ち込む。

「だが今更文句言ったってどうしようもないか…」

恨むなら神様じゃなく自分の籤運の悪さを恨むべきだな。

「しかし、今はいつの時代でここはどこなんだ？」

あたりを見回しながら独り言をつぶやいていると妙な物を見つけた。
携帯電話のようだが、拾ってみると着信音が鳴ったので電話にでる。

『おお、つながったようじゃの』

この声は神か。

「なんの用だ？わざわざこんなものを用意して」

『いや、問題がないか確認のためじゃ。なにか問題はないかの？』

転生先の体が一頭身なのは問題じゃないのか？

「転生先の体が一頭身なのは問題じゃないのか？」

『思ったことそのまま口に出したじやろう』

だってこの体、動いてみるとすごい違和感を感じるんだが。

『まあそれはともかく、能力の説明じゃ。その体は「コピーのもとDX」を全コピー能力分持つとる状態じゃから念じれば好きなコピー能力が使えるぞ』

へえ、じゃあちよつと試してみるか…。『ソード』！

念じてみると俺の体が一瞬光り、次の瞬間には俺の右手に剣が握られていた。

『それから、そっちの世界で新しくコピーしたものは一度能力を解除すると、もう一度同じものを吸い込まんと使えなくなるから注意するんじやぞ』

そこはゲームと同じなのか… わかった。

『それじゃあそろそろお別れじゃの。その携帯はワイプスターを呼ぶことができるから大切に持つておくんじやぞ』

そう言うつと電話が切れた。

全裸なのどこに持ってあればいいのかと思ったが、とりあえず口の中にいれて飲み込んでおいた。

たぶんこれで大丈夫だろう。必要になったときは吐き出せばいい。

「それじゃ、ここはどこか探索でもするか」

護身用に剣を持ちながら俺はその場をさった。

1 話（後書き）

ご感想をお待ちします。

1 2 / 3 コピー能力の名前に『』をつけるように変更しました

2話

どうも、カービィです。

カービィの肉体に日本人の名前なんて似合わなくね？ということ、これからはカービィと名乗ります。

さて、俺が現在何をやっているかというと…

「こつちくんあああつっ！！！」

でかい妖怪に追っかけられてます。

いやコピー能力自由に使えるからといったって、いきなり出てきたムカデの化け物なんて対処できるわけがない。むこうは俺のぷにぷにボディが美味そうに見えるのか一向に諦めるつもりがなさそうだ。

（考える、どうすれば逃げ切れる？なにかいいコピー能力は？）

転生直後に死んじゃった、なんて洒落にならないので必死で考える。

（逃げるには、何かスピードのあるやつ…。そうだ！『ジェット』！）

急いで『ジェット』と念じると、体が光り『ジェット』になる。

（よし、これで飛べば…）

そう思い、ジェットエンジンを起動させ飛ぶ。しかし…

「おぶう！ぐほお！」

初飛行で細かい操作ができるはずもなく、木々にぶつかりながらその場を逃げた。

「能力の確認をしておこう」

顔をしかたま打ち付けて、ひとまず安全な場所に逃げた俺はそうつぶやいた。戦闘能力を考えないとどうにもならない。

まず、俺にできることを考えてみる。

俺の能力は大きく分けて二つ

・カービィの全コピー能力

・他者の能力のコピー（ゲームやアニメのように一度解除するともう一度コピーしない限り使えなくなる）

その他にも吸い込みやホバリングもおそらくできるだろう。

しかし、問題は他者のコピーがその場限りだということ。つまり、その辺の能力持ちを吸い込んで

俺TUEEE展開はできない。なので、元々おれが持っている『ソード』などのコピー能力で戦うのがメインになる。だが…

「経験値が足りないんだよな…」

襲われてわかったが、いきなり敵と戦うなんて無理すぎる。さっきも『ソード』を装備しておいたが相手を前にした瞬間、逃げるしかできなかった。

「やっぱり特訓しかないな」

このままでは、この森を抜けるどころか生き残れるかも怪しい。

「まずはいろんな技の練習だな」

いつ襲われても対処できるように、俺はコピー能力を鍛えることにした。

2 話（後書き）

話が全然進まない…

ご感想お待ちしております。

1 2 / 3 コピー能力の名前に『』をつけるように変更しました

3話（前書き）

今更ですがWiiのカービィまだやってないんですね。
買わないと技がよくわからないから小説に出しづらい…

3話

「おおおおっ！ライジンブレイクッ！」

オーラをまとった右腕を相手に向かって振り上げる。狼型の妖怪は、その一撃をくらい動かなくなった。

どうも、カービィです。あれから数年の特訓の末、ついにこの森では倒せない相手はいなくなりました。

「今晚のおかず、獲ったど〜〜！」

この妖怪は今からおいしくいただきます。妖怪が食えるのかって？ブロックなどあきらかに食べ物でない物ですら吸い込み、飲み込む究極の雑食であるカービィボディをなめないでもらおう。

「調理開始〜♪」

俺は『コック』に変身し、調理を始める。数年間の特訓でわかったのだが、コピー能力は技術面や身体能力に影響を及ぼすらしい。『ファイター』や『スープレックス』になれば肉体が強化されるし、『ソード』や『カッター』になると素人の俺でも武器の扱いがうまくなる。そして…

「『コック』だと作る飯がうまくなるんだよね〜♪」

鼻歌を歌いながら、『コック』の基本装備である鍋に狼妖怪を入れる。『コック』はアニメと同じように敵をそのまま調理することも、ゲームのように普通の食べ物に変換することもできる。特訓と食事しか娯楽のないこの森の中でずいぶん役に立ってくれた。

妖怪を調理し、食べ終わった後、俺は考えていた。

（そろそろこの森から離れるかな）

ある程度の戦闘能力はついた。今なら旅に出て敵に襲われても遅れをとることはないだろう。

せっかく東方の世界に来たのなら、世界中を回ったり原作キャラに会ってみたい。ってゆうか、この森って知能の低い妖怪しかいないくて話相手がいなかったから誰かと話したい。

「よしっ、そうと決まれば早速行動！」

あと何匹か妖怪や獣を狩って、旅用の保存食を作ろう。そう決めて俺は『ファイター』になり、再び狩りを始めた。

「準備完了っ」と

次の日、俺は全ての旅支度を整えた。つといても荷物は食べ物しかなく、その荷物も『バブル』で泡の中に入れて体内に保管してあるから荷物はないに等しい。

「この森ともお別れか…」

目をつぶれば思い出す…、初めて来たときムカデの化け物に追いかけられたこと。初めて生き物をしとめて夜眠れなくなったこと。前世のことを思い出し一人泣いていたこと。

「…ろくな思い出がねえ…」

少しブルーな気分になりつつ、神からもらった携帯電話をとりだし操作した。

「そっぴや初めてワープスター呼ぶな。え〜と、このボタンかな？」

適当にボタンを押して待つこと数秒、空の彼方からワープスターが飛んできた。

「よしっ、忘れ物もないし出発だーっ」

とりあえず適当な方向に行き、人間か知性のある妖怪の集まっている場所を探す。

そう思いながら、俺は森から飛び立った。

3 話（後書き）

感想お待ちしています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0116z/>

東方桃球伝

2011年12月3日15時56分発行